

「災害時の人命救助に迅速に対応できる体制づくりに貢献したい」と話すのは、川崎医科大付属病院（倉敷市松島）の看護師鼠尾弘恵さん（35）＝岡山市北区桑田町。国際協力機構（JICA）の国際緊急援助隊医療チームの一員として、4月に起きたネパール大震災の被災者治療に現地で尽力。帰国し、外務大臣から感謝状を受けた。

外務省、JICAを通じて派遣要請を受け、被災地で災害医療に当たる国際緊急援助隊医療チーム。どんな場所でも医療を施せるよう、登

ネパールで被災者治療



録医師らは日ごろから野営訓練などをして備える。

鼠尾さんは「医療を求める人々の役に立ちたい」と、国際緊急援助隊を志した。2012年に登録以降、初めての派遣先がネパールで、1次援助隊46人のメンバーとして、

5月4日から8日間にわたり医療活動をした。

倒壊した学校の校庭に医療テントを設営し、初期治療や手術補助などに当たった。山間地で昼と夜の寒暖差が大きく、自身も難しい体調管理を強いられた。「緊急事態の対応を何通りもイメージしていたので、冷静に治療に臨めた」と振り返る。

災害時に医療を施す岡山県の災害派遣医療チーム（DMAT）の立ち上げにも携わる。

「自分の技術を後進に伝えられるように経験をもっと積みたい」。災害時の救急医療に活躍の場を見だし、信念を持って歩んでいる。

（小野寺万由子）

